★国大協路線粉砕！
★全国大学闘争と結合せよ！
★東京帝国主義大学解体！
★大学の帝国主義的再編粉砕！

進撃

12月1日（日曜）
第二号
1部　10円
東大闘争全学共闘会議
事務局編集委員会発行

★医・文処分白紙撤回！
★機動隊導入自己批判！
★8・10告示を撤回せよ！
★青医連を協約団体として公認せよ！

学生戦線の連帯を確認

東大・日大勝利総決起集会

二万学友、権力と対決決意

機動隊、日大を四時間弾圧

十一月二十二日、東大・日大両全共闘の主催で、全国の学友二万余の結集により、歴史的大集会が開かれた。東大全共闘は、午前十時に、民青全学連ゲバルト部隊が死守し続けていた中央図書館の封鎖を貫徹した。前日から綿み上った民青全学連は、当初の予定だった図書館前集会を中止、駒場に集まり、夕刻教育学部横で、細々と集会した。意図的にスト圧殺をねらう有志連合等右翼学生の坐り込みを防波堤として。一方、他の全ての闘う学友は、時計台前で偉大な闘いと連帯の決意を誓い合ったのであった。

日共、闘わずに図書館放棄

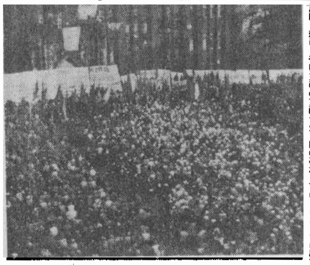
学園闘争の二大拠点、日大と東大が交流、連帯するという事態に縮み上がった官僚は、この集会の開催に対して気狂いじみた弾圧を準備した。四千人の機動隊を配置、お茶の水から本郷までの数き石はすべてとっぱわれているという状態である。検問はきびしく、民青は遂すが「三派」は絶対通れなかった。また市ケ谷の自衛隊に待機命令が出されていたのである。我々の闘いは我々が考える以上に現在の政治状況に大きい意味をもっているのだ。

集会は東大闘争が今直面している課題すなわち十八日の公開予備折衝において明らかにされた大学当局の欺瞞性を乗り越え、当局を屈服させて「七項目要求」を勝利的に獲得していく上で闘争の質的発展としての全学バリケード封鎖を貫徹してゆくこと、さらに「七項目要求」が学生自治の基本的課題である〝すべての弾圧体制を許さない〟という内容を含むが故に全国の学生自治の普遍的条件であることが報告された。また東大闘争の現局面において民青の徹底した闘争破壊行為は、日共党中央の決意にもとずく暴力的ヘゲモニーの奪還のために全勢力を注入して行なわれているものであり、今やすべての学園において日共＝民青との対決は避け得ないことが確認された。

日大からは9・30大衆団交の一応の勝利以来、国家権力を背景に居直り続け、帝国主義の支配が先鋭に表われている古田体制を徹底的に破壊してゆくこと。さらに東大闘争との連帯において文部省に打撃を与えてゆくことが報告された。

さらに各大学の闘争が報告され今後激烈になってゆく政府文部省の攻撃に対する徹底的な闘いを確認し、個別的に闘われてきた学園闘争をその内容において主体的にとらえ直す作業を通じ、連帯を勝ち取る中で七〇年安保闘争を構ってゆく体制を創ってゆかねばならず、そのような闘いに対してゲバルトで敵対してくる日共＝民青を粉砕してゆかねばならないことが確認された。そして、集会後二万余の戦闘的大デモが学内を揺がした。

一方民青全学連は教育学部前で「全学封鎖阻止」等を叫んで集会を行なったが、東大・日大全共闘の連帯による圧倒的な政治的勝利の前に見るかげもなく、お決まりの「全学 封鎖を 阻止した」と総括するのみしか出来なかった。



暴露された新体制の本質

11・18　全共闘との予備折衝

駒場共闘占拠拡大

日共機動隊反革命性暴露

万余の武装デモ、成田を制圧す

日本解放区三里塚の秋祭り　11・24全国総決起集会

主張

加藤の収拾策動を粉砕し　新局面を全学封鎖で闘い抜け！

「七項目」の革命的意義を再確認せよ！

今、「七項目堅持、統一代表団、封鎖反対」なるスローガン（？）を持って登場した「良識派」という部分がマスコミでもてはやされている。この三つを並べているところを見ると七項目がどのように理解されているらしい。「過激なことをせず、形式を整えて大衆団交を行えば七項目は獲取れる」と。さらに一時期七項目が「縮少」だとか「日和見」であるとか嚙付いていた民青諸君までが、「早期解決」を叫んで、工学部や経済学部ではならいざ知らず、かまわず「七項目、統一代表団、封鎖反対」という三種の神器にぶらさがっている。民青にとって「早期解決」が行なわれるならば要求の内容は何でもよいらしい。今、……

当面の「立場」と方針

学友三名帰らず

日共のテロ

医・武装行動隊を結成

……7及び11・2の民青全学連ゲバルト部隊の登場と、それに闘争への血の弾圧をきびしく認識した医学部共闘会議は、医学生・青年医師・若手研究者で、民兵組織を創立することを決定した。医学部全体を大隊とし、ほぼ学年毎に中隊を編成、さらに五、六名単位で小隊を編成した。……

茶店

ボク達が安田講堂をボク達自身の手に取り戻し「解放講堂」と命名したとき、ボク達は幸福を発見した。仮眠からさめたボク達はその幸福を永続的に保証するため、生き生きとした活動を開始した。

◇

それから幸福の百数十日が経った。夕陽が解放講堂の赤レンガを一層赤く染めるとき、ボクは不吉な予感を感じる。しかし直ちに強烈な陶酔感へとそれは広がっていった。〈血の予感〉ボク達と、国家権力との、またその別動隊と化した日共＝民青ゲバルト部隊との熾烈な闘争。講堂前広場を染める鮮血。ボクは恍惚感で一杯になる。自称ヒューマニスト共の虚脱した青ざめた顔。ボクはその中をいま踊り上がる。

◇

夏の暑い密室の中で……

〝崩壊〟の季節

A・S

全国大学闘争に

圧力かける佐藤内閣

文部省、中教審に諮問

提案集会を粉砕

時計台

ポール・ニザン著作集
全九巻　別巻二
●今こそ復権されるサルトルの親友の世界最初の著作集。危機の時代の戦闘的青春を最もラジカルに生き、戦争に斃れた鮮烈な知識人文学者の全体像。「昨日、彼は我々と同世代たったが今日はもう青年たちの同世代なのだ」（サルトル）
アデン アラビア／篠田浩一郎訳／九版／五八〇円
番犬たち／海老坂武訳／三版／五八〇円
アントワーヌ・ブロワイエ／篠田浩一郎訳／三版／六八〇円
九月のクロニクル／村上光彦訳／新刊／六八〇円
ポール・ニザンの生涯／別巻1／佐伯隆幸訳／五八〇円
東京外神田2—1　晶文社　電話 253—2093

〝学生と市民は炎えている〟
羽仁五郎著
都市の論理
現代市民革命テエゼ　歴史的条件　現代の闘争
ここにはじめて　市民のための学生のための　働人のための労働者のための都市学が誕生す
¥950

星野安三郎著
憲法
安保体制を鋭く批判する憲法理論
¥900

あらゆる擬制からの解放をめざす文学と思想の未踏の体系！
吉本隆明全著作集
川上春雄編集　全15巻　配本開始！　内容見本呈
第1回配本　2　初期詩篇 I　習作時代よりの未発表詩集（1）　11月中旬　¥750
第2回配本　7　作家論 I　12月　3配　定本詩集　¥750

田川建三著
原始キリスト教史の一断面　福音書文学の成立
¥1500

ルカーチ
美学 I
木幡順三訳
第一部　美的なるものの特性　（全4冊）
¥1200

真理と自由のために
東京神田駿河台2　(294)6121
勁草書房

合同出版
学生の反乱
ルディ・ドゥチュケ他／船戸満之訳／600円
抑圧的寛容の社会に向かって「実存的嘔吐」をもって闘うドイツ社会主義学生同盟の思想と戦術をここに収録す
五月革命
三月二十二日運動著／西川一郎訳／500円
マルクス主義・アナキズムの旗幟を鮮明にしつつ学生コンミューンの主役割をはたした三月二十二日運動の思想
東京都千代田区神田神保町1—52
振替・東京　65422

リサガレー／喜安朗・長部重康訳　新刊850円
パリ・コミューン
歴史に初めてプロレタリア独裁を刻み込んだパリ・コミューンに一兵士として加担したリサガレーが描く、労働者の運動と〈革命〉の全貌。下2月刊
黒田寛一著　1200円12月中旬刊
ヘーゲルとマルクス
似非マルクシズムを粉砕して真にマルクス主義理論を現代に創造していくための〈実践・理論・組織の弁証法〉たる哲学・革命理論の核心に迫る。
現代思潮社企画思想講座　予告
第一回シンポジウム「日常生活と変革意識」
講師　一、村上一郎　唐十郎（第一日）　二、内村剛介　秋山清（第二日）
期日　12月20日金6時〜9時（第一日）　21日土5時〜8時（第二日）
場所　新宿区若葉町1の4寿ビル4階　国電四谷駅下車歩6分
聴講費　各日150円
定員　150人　申し込みは本社および当日会場にて受け付けます。
文京・小日向1／24／8
振替・東京　72442　現代思潮社

わき上る怒りを暴力に転化せよ
国家権力に対しスターリニストに対し
武装行動隊募集
解放講堂内　中央軍事局

七項目貫徹・東京大学解体へ向け一大長期闘争を展開せよ

全学助手共闘会議

東大闘争の現局面について

日大全共闘をはじめとする全国の学生二万余を結集した一一・二二東大・日大闘争勝利全国学園闘争勝利総決起集会の圧倒的成功によってわれわれ自身がかち得たものは何か、またわれわれ自身が深く問われねばならぬものは何か。それは第一に一一月一五日段階における日共民青のわれわれの闘争に対する全面的な敵対行動を前にして全学バリケード封鎖の意義を把握しきれなかったわれわれ内部の一定部分に生じた動揺を完全に克服したことである。第二に日共民青が真正面から挑んだ軍事的決戦をひきはずし側面にまわりこみながら、一六・十八・十九日の大学当局の対応をも最大限に利用し日共ゲバルト部隊の存在の空洞化ならびに日共民青の裸化を通じて全共闘が完全な政治的勝利をかちとったことである。そして第三にひそかに全共闘の玉砕を希求した大学当局及びその背後にひかえる国家権力に対して、われわれの闘争陣形の健在なることを誇示したにとどまらず、新たな質的飛躍をふまえて、更に強固に東大闘争を闘いぬくことを宣言したこと、並びに図書館封鎖をバネとして、全学バリケード封鎖の展望をきりひらき、教授会を混乱状態へ陥し入れたことである。

東大闘争は、大学当局・マスコミが作為的に流しているような最終局面では絶対にない。一一・二二闘争において全学共闘会議が築いた巨大な地歩にたって、今こそ「全学バリケード」の思想性を深化させ、長期闘争に耐えぬく戦列強化と未来の決意を固める時である。全国学園闘争、とりわけ日大闘争との関連において、きたるべき国家権力との全面対決の視野において、東大ナショナリズムを決定的に克服することが、われわれの一人一人に要請されている。九月二十七日、青医連・医学生を主力とし、基礎病院連合実行委、医学部若手研究者がはじめて参加した赤レンガ館封鎖闘争は、東大闘争の歴史的転換点であり、精神神経科医局会議による医局解体宣言への出発点であった。そして医学部がきりひらいたこの長い過程を、都市工が、経済の大学院が、われわれ助手共闘が、講座制解体へ、東京大学解体へ向って歩み始めたのだ。われわれは、すでにひきかえすことのできない道を進みはじめたこと、すなわちわれわれにとって中間的勝利、妥協の有り得ぬことを深く自らに刻印しなければならない。学生諸君にとって、一一・二二闘争の意義はまさにそのように把握されねばならないだろう。日大をはじめとする全国二万余の学生が助人として結集したのではないことをどれだけの重みをもって受けとめることができるか。東大闘争において国大協路線粉砕が一般的に提起されているのではなく、まさに大内パンフが廃棄できるかどうかに全国の学園の目が注がれていることが深く認識できるか。諸君がこの問いに重大決意をもって応えるとき、一一・二二闘争は真に東大闘争の新たな展開的飛躍点として位置づけられるであろう。

現在の日本における国立大学の総体的具現者である東京大学の制度、秩序、意識の徹底的解体、破壊を東大闘争の根底にすえ、その過程における必然的媒介として、その原爆的物理的表現として、鋼鉄の全学バリケードを構築すること、そして現在封鎖闘争に直接参加している二千余の学生、大学院生、助手、職員が、その全学バリケードを死守する決意を固めること、これのみが、東大闘争の質的飛躍を保証し、未曽有の長期闘争の展望をきりひらく唯一の道である。大衆団交実現の圧力手段としての全学封鎖、貴族的、高踏的、象徴的な全学封鎖と訣別し、今こそ鋼鉄の全学バリケードへ邁進する時がきたのだ。

日共民青の致命的敗北

このような「全学バリケード封鎖」に日共民青が心底から恐怖したのはけだし至当であった。二段階革命論から導かれる永久待機路線に沿って、彼らは大学においても、営々とした努力によって、評議員・学部長クラスにも党員をおくりこむ体制を築きあげた。生協の全一支配、東職執行部のたらい回し等を含む彼らの私有財産はそれなりに巨大であり、彼らにとって「東大」は居心地がよいのだ。この間の日共中央による東大闘争への介入の意義は、何よりもまず彼らがうちたてた体制を守る前衛的性格に求められなければならない。彼らなりの大学闘争現実化の可能性の分析において、日共民青の私有財産の消滅が結論として浮んできた時点で、彼らは一切の要求をとりさげ、大学当局との癒着さえ考慮する方針を決定したのだ。しかし以上の方針は当然のことながら、日共中央の介入の第二の目的である七〇年安保に向けて学生運動のヘゲモニー獲得、トロツキスト粉砕の方針とは二律背反的に矛盾せざるを得ない。さらに暴力反対、体制内的民主主義のかけ声のもとにかきあつめてきた民青内の右翼部分及び民青シンパをきる決意のもとにうち出された七月の戦闘的学生運動の確立なる方針は、その矛盾を更に深化させる役割しか果していない。諸要求をレベルダウンしてまでの自己保身と戦闘的民青の再編成による学生運動のヘゲモニー獲得との止揚し難い[illegible]救い難い混乱を彼らは、この旬日にわたって、まざまざと示した。この混乱の前提が、共闘会議の確立による中央委員会、七者協の崩壊であり、その失地回復のあがきが、党員教授、職員までをまきこんだ民青二〇〇名の強化一般学生、右翼による民青の見はなしという悲惨な政治的結果を生み出したというべきである。二十二日の第三勢力の図書館わき座り込みにもぐりこんだ彼らが、右翼としての振舞も忘れ、インターを唱い出すという一例をとっても、彼らの政治的三半規管がいかに狂っているか、日共民青の致命的敗北がいかなる混乱をまきおこしているかを物語っている。

大学当局の分断策動

十八日全共闘との公開予備折衝に登場した加藤代行は柔軟な幅広イズムを唱え、八・一〇告示における大河内体制の責任の所在の曖昧さとその学生対策的発想を指摘して、有志連合を中心とする単細スト終結願望派をよろこばせた。しかし八・一〇告示の根幹をなす青医連要求は医学部の命運をかけて守る意向をほのめかし、文処分は手続き上全く問題がないことを主張した。そして現在この二大原則を軸にした新解決方針を急拠とりまとめ、提案集会なるものを強行しようとはかっている。彼らの意図は明白である。本質問題をめぐっての学生の動揺を最大限に利用し有志連合を主体としたエン戦派に頼りかけ、当然にも民青が右翼と結合することを読みきって、全学共闘会議の孤立化をはかろうとしているのだ。場合によっては文・医学部をのこして授業再開にふみきろうとする大学当局の方針は、一月以来三〇〇日にわたって闘う中で、文・医闘争を全学、全国の学園闘争のなかで位置づけ、深化させてきた全学共闘会議への真向からの挑戦であり、七項目要求のあからさまな否定である。これに対するわれわれの方針もまた明白である。加藤体制の分断策動を粉砕し加藤新執行部を退陣させることのみ。そして本質問題を克服し、大学解体の飛躍に屈せず、長期闘争を耐えぬく戦列の強化を直ちに開始することである。

諸君、重大決意をせよ！

七項目要求貫徹、東京大学解体へ向って一大長期闘争を展開せよ！

その必然的媒介としての鋼鉄の全学バリケードを築け！

（十一月二十六日）

スチューデント・パワー

その一　西独

沢田　洋

◆「五月革命」、非常事態法反対闘争、「チェコ事件」そして今フラン切下げの見通しにともなう新たな通貨危機と、NATOの再編強化更に一九六九年に予定されるフランス、西独における「NATO選挙」…こうした状況の中で社民党とCDUの「大連合」以降「議会主義的反対」という方向にはいささかの幻想をも持ち得ない西ドイツによって、新たに台頭するファシスト」NPDによって示されるように、「民主々義ドイツ」の、つまりドイツ帝国主義の深部における挫折と、労働者層の多くをも含めた「中間層」に見られる排外主義の台頭、革命への恐怖というものを指摘することができよう。

今ここで、ドイツSDS、正確にはその左派によって進められてきた運動、現代世界の変革を、帝国主義社会のただ中にあって指向する運動、内部に重大な問題を持ちつつも、新たな地平に向っての闘いを続ける運動の諸局面とその背景に関して、いくつか問題点を出しておこう。

◆敗戦、ナチズム、余りにも多くを奪ったこうした歴史も、古いドイツの社会体制をこぼすまでにはいたらなかった。敗戦と、マーシャル・プランは、多くの自由主義者、あるいは「新保守主義者」達を、権力の場につけたが、経済的繁栄、教育制度等には、その根底において古いものを変えなかった。機制の「民主々義」に関する幻想は、アルジェリアにおいて崩れ落ち、更にベトナムで、明白に暴露された。

一九六五年—六六年の経済的後退期において表面化した教育制度の諸矛盾はその資本主義的合理化の政策となって現われ、学園闘争の契機を形づくった。一九六一—六五年にかけて、SDS（ドイツ社学同）によるイニシアティブのもとに、種々の運動が起される。アドルノ、マルクーゼ、ハルバーマス等「フランクフルト学派」の復帰が行なわれた。一九六一年に社民党SPDと手を切ったSDSは独自に変革の道を追求する。第三世界における革命と、それからの決定的隔りという状況の中で、

投石でわたり合う、西独SDSと警官隊

彼らがついに世界に自己を「投企」し始めたのが一九六六年ベルリン自由大学におけるシット・イン闘争であった。それに引き続いて行なわれた、一九六七年のイランの反動的シャーに対して組織されたデモと、警察官による学生の射殺は、全国的に種々の反響を呼び起した。全国的に種々の自立した青年組織が生まれ、いたる所で、あらゆることがらについて討論がおこった。教会、政党、議会、裁判所大学等の権力の諸機関は、権威とか伝統とかいったインチキを相手にしない青年達によって次々とその幻想性を、その死んだ中味を暴露され、粘土の足をあばかれた権力は、この自立した青年達、この捉え所のない「反社会分子」、「平和の敵」どもに対して怒りにふるえた。大連合の中で手先化したSPDは云うにおよばず、ジャーナリズム、特にシュプリンガーは、彼ら学生、青年達に対して抗議の砲火をあびせた。

◆他方、SDSの革命的部分は、その戦列にまぎれこんだ反革命的部分との重大な対決を迫られている。SDSの中に、いくつかの異った政治潮流が存在していたことが知られている。その第一は、「修正主義者」（マルクス主義的なプロレタリアート等の概念には疑問を持つ。アナーキストを含む）第二はKPD（ドイツ共産党）派で、プロレタリアート本体論を唱え、マルクス・レーニン主義の名の下に社民との再結合ないし部分であり、第三はこうした方向に真向から反対する反権威左派といわれる部分であり、ドウチケはこの第三のグループに属するといわれる。反権威派の指向する所は、例えば、学園闘争における態度からもうかがわれるが、社民系のSHBが、いわゆる学生の参加に基づく協議会方式を出したのに対して、SDSがこうした自己欺まん的「参加」を否定し学生はまず自らを一つの主体的な部分として、自立した批判者とした確立しなければならないのだという思想に基づいた方法を出しているのである。マルクーゼの「否定こそは弁証法の根幹である」という思考、彼の分業的技術社会批判、行動主義批判に、立脚しつつ、更にそれを越えて革命的実践に取り組んだ彼らこそ、ドイツにおいて先進国革命の現代的諸問題に正面から対決しようとしたのだ。KPD派は、救いようのない社民追随な教条の権威によって飾ろうする方向、完全に反動的な方向を持って現われている。

五月終りに行なわれた非常事態法反対闘争は、しかし敗北に終った。5・29のフォード労働者集会でも、ボーウ大学生の闘争においても、闘争の終焉と、闘う部分の孤立化を目指す労組指導部の方針が、貫徹されてしまう状況があり、激しい警官隊の弾圧にあう学生を冷たく見放した労働者は、フランスの状況との違いを浮きぼりにした。全人民の、そして特殊に内面化された強制労働の中で主体性を失っている労働者の、新たな形、新たな路線による組織という問題が、今再び突きつけられている。

◆更にブルガリアのソフィアで開かれた、一三八国五〇〇団体を集めたスターリニスト主催の会議で、反権威派とKPD派の決烈は完全になった。ソフィアで秘密警察の手をかりてドゥチケらにゲバルトをかけたKPD派はその後開かれたSDSの臨時大会でチェコの事態に関してソ連を支持する方針出して大衆的に否定されるや大会から退場しSDSは彼らに変る新執行部を選出した。年配のKPD派らを動員して開かれた解任執行部の「大会」は、左翼の入場を許さず、内部にしのびこんだ左翼の部分はたたき出されたうえに、警察に引き渡された。こうしてSDSから分裂したKPD派は新にSDAJ（社会主義ドイツ労働青年団）を組織して動き始めた。

こうした中で、自己の非組織性、非セクト性を存在理由にしてきたSDSも、自己変革をとげざるを得ない。最近でベルリンで行なわれた学生のデモは、彼らがこれまでになく戦闘的になっていることを示している。事の全国的国争に参加した弁護士ホルスト・マーラーの資格停止処分に抗議する学生達は、マーラーが裁かれつつあった裁判所に対する実力行動を組織し、ヘルメット、ゲバ棒、石、鉄棒という武器によって、騎馬警官隊を何度となく追い返した。

チェコにあいつぐNATOの再編強化、国際通貨危機の再燃、そして六八年六月の選挙という客観情勢を迎える中で、SDSに結集する革命的な青年は、学園における一定の成果から更に進んで全人民の意識化という作業に取りかかる為、思想的、組織的飛躍をとげなければならない。

（注・上記は、アメリカSDSの機関所 New Left Notes 一九六八年七月二十日号及び、最近のドイツ新左翼の機関紙 Was Tun に基づく。批判大学に関しては、新しいニュースを持たない）

（さわだすすむ・仮名・筆者はICUの教員であるが、アメリカに三年居住し、欧米の学生運動を専門的に研究された。御好意により特別寄稿を願ったものである。—進撃編集委員会）

現代社会とテクノクラート

山口顕治

[A] 問題の所在

今日もまた、何万という人の群が、団地からは吐出され、スシづめ電車にゆられて、黙々と社会的生産の体系に突進して行く。現代の労働者達は、壮大な生産のピラミッドの中で、その体系を操作し、管理する技術官僚・テクノクラートへと変貌しつつある。

彼は、純経済学的には、プロレタリアートに属しながらも、まさにその労働過程そのものによって資本としての思考様式を付与されるのである。生産の組織化と管理化は、彼の自らの要求をして、体制の要求を具体的に表現させつつ、同時にプロレタリアートとしての彼の潜在意識は、不断に彼の思考秩序から、離反しつづけねばならないのである。

そしてこの様な、分裂人間としてテクノクラートが、現代労働力体系の中核体となって来つつあるのである。

かつて総評民同が、職場労働力の中核である、熟練労働者を中堅活動家として掌握する事によって、「普遍量」に比せられる権力を持った様に高度経済成長後期以後の、労働戦線の労働のポイントは、このテクノクラートにこそ着眼せねばならぬのではあるまいか。

かつて共産党によって、プチブルと規定され抑圧されて行った、技術者、研究者、勤務医師事務労働者の運動が、いま真剣に構想されねばならないのである。

[B] テクノクラートと職業

竹内芳郎氏は、第九回全国医学生ゼミナールの記念講演会で「職業的実践の普遍要求が、社会的変革的実践につながらざるを得ない。」という事を語られた。

しかし、既存の社会的分業体制を前提とした「職業的」実践の追求は、ますます専門化し、部分的、体制的とならざるを得ない。

まさに「職業」を具体的担体としてこそ、体制の自己展開は現象しているからである。

ドイツ語のBERUFや英語の Calling という言葉もその事を暗示している。共に職業が、神に「呼び出された」人の使命である思想を含めた言葉である。階級社会で生じる、自己の意に反する行為は、神の意志として説明される。かくて神は、階級社会とその命運を共にする。

「笛吹きは笛を吹く時が、最も幸福である」（アリストテレス）確かに人は、自己の得意とする労働過程の中でこそ最大の生きがいを見出すものである。

しかしその様な労働は、アプリオリに、現在の分業体制の一部に包摂されたものとしてはあり得ないだろう。むしろ現代の分業体制こそは、資本制にゆがめられた、苦痛に満ちた非人間的労働以外の何物であろうか

従って、人間的労働は、「職業的」労働を否定した前職業的労働としてしか展開し得ない。「職業」以前に回帰した地点に立った労働、常に全体性を回復し得る専門化のみが人間的たり得るのであり、変革的、社会的実践につながるのである。

テクノクラートの潜在意識は不断に彼を、前職業的世界に呼びかけている。管理化と自己拡散の抗争は、政治的経済的のみならず社会的・精神的・文化的な全領域でくり拡げられる。

しかし、その潜在意識は、全般的管理化によって下から圧迫されつつも、上からの目的意識的理論によってはじめてその解放を見る。批判的知性と運動世界の衝撃のみが、よくこれを可能ならしめる。

[C] テクノクラートと未来

現在、帝国主義社会は、突然の痙攣で、左右への両極分解をとげている。ヨーロッパでは社民を包摂したブルジョワ内閣への反発は、極国家主義者・人種差別主義者の台頭をうながし、旧方既成政党、組合組織からはなれた地点に、未曽有の急進的戦闘的学生権力を表出せしめている。アメリカ・日本においては、伝統的支配様式を意識的に強化しながら、進行するファッショ的恐怖政治への移行は、伝統的労組・議会のパイプとは全く無関係の所に、学生・黒人・青年労働者の、暴動的政治闘争を爆発せしめている。この様にして、議会主義と組合主義を二本の柱とする救抑圧エネルギーの合理的発散機構、ブルジョワ民主主義は音をたてて崩壊に向っている。それ故、今後の帝国主義内の階級闘争の主軸は、秩序と無秩序、形式と無形式、合法と非合法を両極として展開される。

ベトナム人民を先頭に、ビルマで、インドで、南アフリカでラテンアメリカで、収奪されつづけた第三世界人民は、全地球的に血みどろの蜂起に立ちあがっている。

大英帝国のスエズ以東からの後退と、米帝のアジアでの威信失墜の間隙をぬって、世界第二位の日本独占は、不死鳥の様にアジア・太平洋に、その覇権を回復しつつある。第二のベトナム戦争として、インドネシア戦争が、帝国主義が日帝の行手に立ちふさがっている。その背骨として新安保条約は確立されようとしている。

一方、軍事費捻出のために、財政硬直化の美名によって、行政合理化が断行され、消費者米価・医療費は年々上昇して行く。金融か占化に伴い、独占同志が国際的大合併をやり、労働者への管理・労働強化の攻撃は、日本帝国主義の死活をかけて断行される。

体制化し、空洞化し、官僚化した労組は、右寄り統一論と議会政策をめぐって混乱しながらますます社会ファッショ的部分と、急進的戦闘的部分へと分解の速度をはやめている。

そして管理化のおくれた大学のみが、反帝国主義の急先鋒として表出した闘いを、未曽有の深さと広さをもって敢行している。

激動の時代は始まった。テクノクラートの未来は、その激動世界の中でしか語り得ない。

全社会的な一元的な統合と極端な合理化の過程は、常に同時に不断に、デオニソス的な非合理性を生産してやまない。その同一の過程は、構成労働者就中テクノクラートの個々人の頭脳には、人格分裂として現象、全社会的には非合法的・反秩序的闘争の勃発として現象する。

目的意識的に反体制的自我に回帰したテクノクラートは、その社会の批判的知性によって、この社会的デオニソス的奔流の、指導的パワーとならねばならない。彼らがプチブルではなく、プロレタリアートである以上、彼らのインテリゲンチア的運動は、没主体的・個人的な参加ではなく、生産点に立脚した主体的な闘いとしての運動が構想できるのである。（やまぐちけんじ・精神科医師連合）

資料

11.22東大日大闘争勝利　全国学生総決起大会に結集せよ！

東大　全学共闘会議

日大　全学共闘会議

全国のすべての学友諸君！

東京大学ならびに日本大学の闘う両全学共闘会議は、日本戦闘的学生運動の歴史的総決起大会への結集を呼びかける。

現代世界の根本的矛盾は、今日人民の血みどろの闘いの展開をつうじて明らかに激化している。人民の未来をかけた解放の闘いは、疑いもなく、全世界学生の力によってより広く、より深くつき進んでいる。

フランスの「五月革命」を、あるいは、オリンピックを前にしたメキシコの反政府闘争を、そして日本における十・二一反戦安保闘争を赤い糸のように貫いている階級闘争の必然性は、いま、日本全国学生の一大総決起をますます強く要請しているのだ。

激化する全国学園闘争の両天王山「東大＝日大闘争勝利」の旗のもとに全国学生の総力を一点に結集し、圧倒的銀杏並木集会に三万人の大結集をかちとり、この激動に勇躍して応えようではないか。

いうまでもなく、東大、日大闘争は日本帝国主義の根幹を大きく揺り動かし、支配と抑圧の重大なる危機をもたらしている。

ブルジョア支配権力の大学における象徴であり、官僚、エリート養成の場である東大と、独占資本と癒着し、中堅労働力育成のために営利主義を貫きつつ、徹底して恐怖政治的学生自治弾圧をなしてきた日大において、実に、空前のストライキ闘争が展開されていることこそ、帝国主義の危機でなくして何であろう。

日大闘争は、一五〇日間の全過程のなかで、学園闘争史上全く未曾有の権力の大弾圧によって逮捕総数七〇〇余名と[illegible]をうけている。だが、九月三〇日の大衆団交は「日大方式＝人民裁判」といわしめ、輝かしい金字塔をうちたてた。しかも、右翼暴力集団の度重なる襲撃を断固撃退しつつ日大体制の「破壊」にむけて、武装ストライキの非妥協的闘いを前進させている。敗北や後退は日大闘争にはない。あるのは勝利と前進と決断なのだ。

一月二九日、医学部が決起して以来、二九五日経た現在、東大闘争は全十学部の無期限ストといった大きな闘いに成長した。かくて資本制日本百年の歴史において常にその中枢に位置していた東大の反人民的過去の一切が裁かれようとしている。「処分白紙撤回」に始まる七項目要求を掲げて闘い抜かれてきた東大闘争は、今日決定的な局面を迎えている。実に東大の「革命」が果せるか否かの決定的段階に到達している。

この時点で、共闘会議の闘いの前に敗北し、破産を宣告された日共＝民青は、全国よりゲバルト部隊を導入し、先進的学生の武装解除とバリケード破壊を行なうことにより、東大闘争を流産させ党派的利益を貫徹せんとしている。東大闘争の勝利はかかる困難な現局面を全学バリケード封鎖闘争をもって強固として闘い抜くことによってのみ勝ち取りうるのだ。

全国の学友諸君

東大・日大闘争を天王山とする全国学園闘争の勝利か敗北かの中に、日本全国学生の、そして全日本人民の未来がかかっている。

「大学問題は政治問題である」という十月一日の佐藤発言が雄弁に立証している。

東大＝日大闘争を文字通り、闘う全国学生の全力量をあげて勝利させるならば、うち続く全国五十数大学の学園闘争の勝利と、反戦反安保の諸闘争の展望を大きく切り拓くだろう。

来るべき、人民、学生の総反撃をめざして、東大銀杏並木の総決起集会によって、全く画期的な学生戦線の大統一が実現されようとしている。国家権力の弾圧、右翼暴力の跳梁、日共＝民青の反革命的台頭のもとで闘いは困難きわまりないし、妥協な連帯は許されない。真の結合は闘う中に存在する。いま、闘いを通じて、大統一戦会がかちとられんとしている。

「東大＝日大闘争勝利」の旗のもと全国学生は総決起せよ。

東大ならびに日大両全学共闘会議は重大なる決意と誇りをもって「一一・二二東大＝日大闘争勝利全国学生総決起大会」への総決起を呼びかける。

日本共産党を告発する

◆日共＝民青にとって東大闘争とは何か◆

工学系闘争委員会

日共＝民青にとって、東大闘争に勝つことは最早目的でない。何故なら、彼等の東大闘争把握はとうの昔に大衆的に乗り越えられたからである。彼等にとって問題なのは東大闘争に党派として負けないことなのだ。繰り出す論理が全て破綻しつくした日共＝民青は日本共産党そのものとして、武力弾圧闘争破壊に乗り出した。学園闘争の両輪拠、東大と日大で民青がヘゲモニーをとれないことは、単に民青「全学連」の問題にとどまるものではなく、上部団体日共にとって、その「民主化」路線の決定的破産として（民族民主統一戦線」という彼らの革命路線の個別闘争における破産として）許し難い事態なのだ。党派的利害のためには、むき出しの武力をもって臨み、えん戦ムードの右翼とでも結託して、なりふりかまわず東大闘争をねじ曲げてヘゲモニーをとろうとするのだ。これこそが、まさに日本の「前衛」党、日共の姿に他ならない。

◆民青いうところの民主主義とは？◆

日共＝民青はことあるごとに民主主義を口にする。彼らが軽々しく口にする民主主義とは一体何か。それは彼ら自身の手による操作民主主義であり、「ボス交」であり「馴縁会」である。それは日共路線における大学「民主化」の内実——学生Mに於ては、自治会の乗っ取りであり教官層に於ては、彼らのいう所の「民主的教官」を評議会に送り込むことに端的に表わされるものなのだ。然るに「新」執行部に多数の「民年的教官」を送り込めるどころか、逆に反動内閣が現出し、全く無視されるや、彼らは一切の仮面をかなぐり捨てたのである。彼らはいう。「民主的ルート——」「東大のほとんどの自治が加盟されている（民青）全学連——」（民青ビラ面より）・八学部の学生大会決定によって共闘会議に結集した七項目要求貫徹を目指して闘われている東大闘争をいかようにねじ曲げようとも、このような破廉恥な言辞を吐ける筈がないのだ。しかも十一月六日、東C代議員大会での決議「七項目要求実現を目指し、全学ストライキ、全学封鎖で、全学共闘会議に結集して闘う」により、彼らの論理は完膚なきまでに粉砕されたのだ。彼らの言葉によれば極めて「民主的」ルールに従ったところの封鎖闘争を彼らは武力をもって弾圧したのである。更にこれに追い討ちをかけるものとして十一月八日東C大衆団交があった。野上学部長が、代議員大会に基き共闘会議を唯一の正式交渉相手とすることを締めたことによって、今や民青は完全に東大闘争から疎外さるべくして疎外されたのだ。この事態に狂気した日共中央は日共東大細胞を緊急招集し、再度路線転換（＝右傾化）を強要し、武闘をもって闘争をハゲタカ的にサン奪せんとしてきたそれが十一月十二日図書館前、十一月十四日、駒場・号館封鎖阻止への「都学連」ゲバルト部隊の派遣なのだ。

◆自己批判抜きの路線転換◆

党派的利害の優先するところ、論理は二の次となる。いや、党派的利害こそが「論理」となり、闘争が私物化されるのだ。そこでは一切の路線が自己批判抜きで変更され、闘争そのものの質さえも無視される。東大闘争における日共＝民青の路線はまさにそのようなものとしてあった。彼らははっきりといった。「全学封鎖も在りうる」と。これを如何に総括し自己批判した上で、十一月十日の赤旗による路線変更（＝右傾化）を行ったのか？これはまさに大衆を欺瞞する以外の何ものでもない。このような自己批判ぬきの路線変更こそが、日共＝民青の歴史を貫く「赤い糸」であったことは周知の如くである。

東大細胞は遠くなかれ二十年以上も前、一九四六年九月にはっきりと大学の「民主化」をスローガンに掲げ、現在の彼らと何等変るところのない、否むしろそれ以上に、戦闘的＝革命的な方針を打出している。（資料戦後学生運動I P94）過去の闘争においてこの方針を貫徹し得なかったことを彼らは、いかに否定的に総括し、この強烈な東大闘争を闘っているというのか！

◆四項目要求なるものの破綻◆

日共＝民青は四項目要求なるものを宛座し東大闘争をサン奪せんとしてきた。しかし、それが、いかにまやかしであるかを彼ら自身が暴露している。まず第一に、全学闘（＝文・民青）は文・学友の大衆的つきあげにより、彼らの四項目にもないところの文・不当処分追求を行うことによってしかヘゲモニーをとることは出来ないと判断し、文・無期限団交を始めたところが、彼らは林「新」学部長から文・処分撤回の言質をとれないとみるや、無責任にも追求団交を放棄したのだ。文・団交の明らかにしたことは「人道問題」等々の末梢的な次元で把えられるものでは決してなく、いわゆる「東職会」路線では文・処分はまさに、極めて「正当な」処分として処理されうるということを示したものとして把えられねばならないのだ。

第二に一一・一四付の東大民主化行動委なるもの"トロツキスト暴力集団を武装解除せよ"なるビラで彼らは、はっきりと言った。「我々は一体何のために百数十日に及ぶストライキを続けてきたのか東大の管理運営を民主化して、事実根源の処分や独断的な機動隊導入のような誤りを再び繰り返させないためである」と。事実根源の処分でなければ良いというのか！独断的でなく「民主的」に機動隊導入をすれば良いというのか！彼らは、ここまで東大闘争をねじ曲げたのだ！

更に、六・二〇段階で闘争を申し入れてきた医歯大学友に「帰れ」なる絶叫をただきつけたことを一切自己批判することなく、日共＝民青は、官憲の介入を招くという理由で全学封鎖に反対し、そのために「都学連」及び地区民青のゲバルト部隊を公然と導入してきた。

そして、彼らは全都の大学に共闘会議を誹謗中傷するビラをまき「トロツキスト」粉砕のために東大への結集を呼びかけている。かかる日共＝民青の闘争介入はいわゆる新左翼全体に武力的対応を余儀なくさせ、かくて東大は二つの政治集団の一大決戦場と化すことは火を見るより明らかであり、このような事態によって官憲の介入を招くことは、正常な頭脳には必然的プロセスとして映るのである。

かくて、日共＝民青の「官憲導入反対」なるスローガンは彼らの党派的利害からのみ提起されてきたことが、しみじみと理解されるのである。ここに至って日共＝民青という一つのセクトは東大闘争とは縁もゆかりもないものであることが明白であり、むしろ、そのようなものが我々の闘争に介入してくる以上、それはまさに闘争敵対者＝反革命勢力に他ならないのである。

没論理的紛争終結願望集団 《有志連合》諸君！

■11.22 全国学園闘争勝利総決起集会は、万余の学友を結集して革命的勝利を勝ち取った。ところが当日、有志連合 諸君は"外部 勢力 導入反対"、"暴力反対"を叫んで、あやしげなハプニングを演じた。以下に当日の諸君の主観的意図と客観的な役割を解剖してみよう。

■ "外部勢力導入反対"？！

11.22 当日、有志連合諸君は "外部勢力等導入反対"を叫び、又、工学部2.6号館には "東大の問題は東大人の手で"なる垂れ幕が下された。

東大が社会から孤絶した存在であるのなら確かに東大の問題は東大人の手によってしか解決できないであろう。しかし現実はそのような幻想をはっきりと裏切っ っている。東京帝国主義大学はまさに体制の要請を受けた形で年々大量の高級官僚と高級技術者を創造し、人民を抑圧し、矛盾を再生産しているのだ。しかも体制のイデオロギーを洗練させる為には、一定程度の批判機能を大学に持たせる必要がある。これこそが与えられたものとしての「大学の自治」＝国大協自主規制路線であり、資本主義体制下における合理化された大学の姿 に他な らない のだ。既存の「大学の自治」に挑戦する現在の東大闘争は従って当然の事ながら、日本独占資本主義体制下の大学の在り方に刃をつきつけている事になるのであって、単に東大のみの問題ではないし、ブルジョワ・マスコミを総動員し、権力の暴力装置＝機動隊を繰り込む事も至極当然の事なのだ。かくして、大学が体制の外部に孤絶して存 在している のではな いが故に、東大闘争は全社会的な闘争の下に位置づけられざるを得ないのだ。

次に百年の歴史を誇る東京「帝国主義」大学はごく最近の例をとってみても "大学の自治に関する東大パンフ"のように、日本独占資本主義体制下の大学の頂点として他大学の在り方に鉄の枠をはめてきた。かゝる歴史と現実をふまえれば、東大闘争はインターカレジな闘いとして展開されねばならない事は自明の事である。 "東大の問題は大人の手で"なる工教官の呼びかけに共鳴した有志連合諸君が"東大ナショナリズム"に固執しようとも、その結果抑圧される他大学の闘う学友は決してそのような事態を座視する事は出来ないであろう。

我々は、全国学友との連帯をあくまで追求する。11.22 全国学園闘争勝利総決起集会はその萌芽を有するものであった。更に我々は全国の闘う労働者との共闘を追求する。その事を通してのみ、我々の、あるいは諸君の東大人意識を完膚なきまでに粉砕し、人間意識を創出する事が出来るのだ。

■ "暴力反対"？！

"ともかく暴力はいけない"……これは小学校以来教え込まれてきたブルジョワ・ヒューマニズム＝飼い馴らされた思想に過ぎない。これをもって、処分等々の権力の数かつにして陰湿な暴力に対決し得ると考える程諸君は幼いのだろうか？！全学無期限ストをもってしても当局は我々の要求をのまない、いや東大が東京帝国主義大学であろうとする限りのむ事は出来ないという現実を諸君はどの様に把えているのだろうか？（中略）

諸君がガンジーの"非暴力主義"に幻想を抱き諸君の行動をそれにダブらせてイメージしているとしたらガンジーこそいい面の皮である。ガンジーの背後には数千万の農民がひかえており、彼を死なせるという事は直ちに農民の暴動発生を意味したのであって、かかる状況の中で彼がハンストをやるのは死んでみせるぞという、まさに権力にとっては戦慄すべき情勢だったのだこれは"非暴力"などではなくして抑圧の暴力に抵抗する暴力なのだ。諸君及び我々の背後に農民が控えているのなら、我々もガンジー主義を貫徹してもよかろう。しかし現実に控えているのは決して農民でも人民でもないのだ。彼らは我々も含めて諸君の未来形を経験的に見ることなく抑圧者として把えている。うそだと思ったら三里塚の農民に聞いてみるが良い。自らのよって立つ不当な存立基盤を打破する事なく体制に包摂されていく人間は、被抑圧者にとってはダキすべき抑圧者でしかないのだ。諸君の背後に来るのはかくして人民大衆ではなく、体制であり、体制の下僕たるマスコミであり、闘争破壊者、日共民青なのだ。かかるものを背景にして出て来る諸君の"非暴力主義"ブルジョワヒューマニズムの果す役割は今やあまりにも明らかである（中略）

かかる "非暴力主義"の名の下に諸君が「先生方も一緒に坐り込んでください」と哀願する時は、対決している筈の教官と学生との間に奇妙な共斗（何に対する共闘なのか？！）が出来あがってしまい、一時的に退歩した当局 の抑圧の 暴力を復 活させ、国家権力と一体化して闘争圧殺を謀るマスコミの暴力を増長させ、更には連日のアカハタに見るように日共の我々に対する闘争圧殺に資するようになったのである。即ち、諸君の非 "暴力主義"が新たな複雑で巧妙な暴力を創出したのである。この抑圧的な暴力の絶えざる再生産こそが現体制の本質であり、この出口のない暴力の拡大再生産の材料を粉砕するために、我々は正当な抵抗権としての暴力を持たなくてはならないのだ。

ここに至れば、有志連合諸君が教官と唱和する "東大の問題は東大人の手で"、"暴力反対"なるお台目は今や論理的に全く破綻をきたしている事は火を見るよいも明らかである。しかも諸君は工有志連合諸君等のように7項目を具体的要求として掲げている。しかしその7項目要求なるものは、"紛争が早く終結して欲しい"という諸君の主観的願望と東大闘争を外在的なものとして把えた場合7項目要求しか有り得ないという客観的事実とがかけ合わされて生れてきた奇型児ではないのか？！7項目が 実力闘争 の過程で生 れて来、なおかつ現在まだそれを貫徹できないでいる以上、更なる実力闘争なしに一体いかなる形で諸君は7項目を勝ち獲ろうというのだ。今まさに諸君に問われているのは7項目要求貫徹の為の具体的展望なのであって、破産した論理の上に築かれた幻想としての展望などではないのだという事を銘記して欲しい。（後略）

都市工学科大学院スト実行委員会